

六七 中觀音左右寒山拾得圖

廣島 侯爵 淺野長勳氏藏

紙本墨畫 挂幅裝 三幅
 中幅一〇九・九厘（三尺六寸二分七厘）
 左右幅一〇九厘（三尺五寸九分七厘）
 横各幅三八・二厘（一尺二寸六分）

巖上に晏坐して伏しがちに水に浮ぶ月影を見る所謂水月觀音の一幅を本尊として、左右の二幅、一は樹下の岩角に墨を磨して筆をとる寒山と、一は懸崖の下に經を讀む拾得とを脇とする三幅一對である。中は能阿と傳して畫傳に其の人の印記として收録する朱文方印一顆を押し、他は鼎形鑒岳及び眞相二字の方印を鈐する。即ち祖孫二宗の跡を合せた名什である。

絲のやうな細線無心に流れて白衣の複雑な褶襞を描き、是れにあるか無きかの淡墨を暈し、白玉の佛身と共に、背の巉岩を外暈としてくつきりと浮き出させた邊、此の畫手の尖鋭な神經を味讀して先づ此の中尊の一名畫手の筆に出でたのを知る。晏坐の姿の迫らざる清楚な美しさにも心ひかれるが、唯此の畫、畫石の法に一味の鈍さを藏する。と見れば左右の幅、飽くまで和尚様を規撫し

（寸原） 記印圖山寒

（寸原） 記印圖音觀

て、輕利洒脫の筆縱橫無礙に奔馳し、或は寒拾兩仙の姿相の變化ある照應を描出し、さては一氣に描き下した松樹乃至繩墨に拘らぬ懸崖、其の間點苔に、竹葉に、或は屐子に程よく濃墨を點じて畫趣を高調するさま風神極めて清古、能く古人の室に入つて尙近世の雋銳を加へたるもの。寔に名什の一たるに背かぬ。遮莫、此の三幅果して各々の正跡であらうか。眞能は姑く措く。寒拾に就い

圖 版 解 說

ては其の印記の尙容易に信じ難いものがあるにしても、また眞相の紛ふ方なき正筆なるものも、方今まだ明かでなくて、様式の如何を比較するに難いにして、若し所謂阿彌派の概念を以て臨めば正しく其の嫡流の跡、是れを他の畫宗に擬せんこと寧ろ困難にして、既に古く眞相と傳する以上、或は是れを其の人の作かとも亦強ひて否み難い。少くとも其處に時代的な矛盾は認められぬ。さて眞能に至つては如何。たとへば此の兩跡を具に比照するに、主題に佛仙の差はあれ、また寒拾の名跡に比してこそ多少の遲滯の筆はあれ、柔毛の筆を行つて概して淡墨仕立の和尚様を追へるも等しきが上に、細部の手法、たとへば一部の畫石の手法にも、點苔にも、さては觀音と寒山との手指を描く行筆にも、此の兩跡は非常に多くの共通點を示す。無論、此の中幅下方五寸許に切斷の跡をとめて、こゝにも多少の問題はあるが、今其れを考慮に入れぬとしても、何れは別幅を後に合裝して三幅一對としたもの、それにしても此の兩家の跡、或は同一手の時を前後する作かの疑ひすら懷かれる。少くとも能、藝、相三代の畫宗を考慮し、特に眞藝の瀧山水圖の北宗的手法を此の中間に位置する時、我々は尙更に此の能相の作に一種の疑問を感じざるを得ぬ。今筆者は慌しくも是れを同一手の作と推定せんとするものでは無いが、少くともこゝに祖孫五十年の差を様式的に考へることは如何なる點より見るも困難である。

八 蕭白筆柳下鬼女圖

東京美術學校藏

紙本淡彩 二曲屏一隻 各扇
 豎 一五四厘（五尺八分二厘）
 横 一五二・六厘（五尺三分六厘）

蕭白は勢州の人と傳へられ、天明元年正月七日五十、二歳歿一説天明三年歿。明和、安永の頃京に住し、非凡の畫才を有しながら轆轤落魄の裡に一生を終つたと云ふ。その畫圖概ね怪醜を極め悽愴の氣人に迫るものあるは、彼が剛直狷介の性世に容れられず、人に忤ふ奇筆を弄したものと見られ、誰れかこの不遇の畫人をして徒に狂逸の作を成すとのみ咎め得るであらうか。

本圖の如きはさなきだに落莫たる風荒ぶ薄暮の中に、鬼女髮を亂してイ立せ

るさまを描き、漫ろに凄氣の迫るものがあつて、彼得意の畫圖を成すものである。乍然、形容の怪醜なる點はたゞ鬼面にのみ存し、その肢體の如きは尋常にして、殊に柔膩な細線になれるもので、試に鬼面を覆へば路傍に不圖さ迷ひ出た狂亂の女性かと見紛ふばかりである。かく怪妖を描きて然も平靜なる畫致を保持するは彼の畫作としては稀

(寸原) 記印圖女鬼下柳

内外彙報

桃山障屏畫展覽會 四月十五日より廿八日迄、恩賜京都博物館に於て上記特別

展觀が催された。京都市の寺院並に個人所藏の障屏四十餘點を蒐むる大展觀であつた。聚光院藏松鶴蘆雁圖襖、豐國神社藏豐國祭圖屏風、建仁寺藏宗達筆風神雷神圖屏風、妙心寺藏友松筆牡丹梅花圖屏風、大德寺藏二直庵筆柏廳蘆鷺圖屏風等著明の國寶も陳列されたが、恐らく主催者の意圖は同時代の名品を網羅せんとするにあつたのではなく、寧ろ比較的未知の作品を紹介して世に問はんとするに在つたのであらう。他に資料的な意味に於て、宗仙寺藏花鳥圖襖、聖護院藏清元と判讀さるゝ印記ある松櫻楓圖屏風、兩足院藏等伯の落款ある竹林七賢圖屏風、入江幾治郎氏藏等伯風の竹鶴圖屏風、市田彌三郎氏藏宗也筆柳橋水車圖、禪林寺藏等兩筆韃靼狩獵圖屏風その他を見た。唯忌憚なく云へば、その出陳點數の多きに從つてその質の低下も亦罷むを得ないであらうが、撰定に際しては今一段の慎重を期すべきではなかつたかと惜まれた。(梅津)

繪卷佛畫特別展覽會 去る四月十七日より三十日迄、奈良帝室博物館は上記の展覽會を催した。

に見るところである。

尙焦墨もて描出せる柳樹の淋漓たる墨氣の妙、更に彩色極めて簡にして柳葉に淡藍を點じ、鬼女の肢體に淡俗赭、裳に淡朱を置くのみにてよくその實に即し、殊に風に翻轉せる柳枝に沿うて外隈を施したなど、颯々たる風の響さへ聞ゆるばかりの異常なる技法に至つては三嘆の外はない。

落款に「平安散人、曾我蕭白暉雄圖」とあり、傍に白文方印「鸞山」と朱文方印「曾我氏」の二顆を鈐す。本圖の如きは蓋し蕭白一家の佳什として推稱するに足るものであらう。(菅沼)

出陳繪卷は朝護孫子寺藏信貴山緣起、東大寺藏華嚴五十五所繪卷、安住院藏地獄繪卷、曹源寺藏餓鬼雙紙、粉河寺藏粉河寺緣起、益田孝氏藏新因果經の六點の名品を數へ、他に今回始めて公開された粉川寺、御池坊、鹽川正三家等に藏せらるゝ粉川寺緣起の摸本が出品され、此の三本は何れも徳川時代の寫し乍ら、原本の復原等に興味ある資料を提供した。唯折角の出品も全卷展觀の準備なきため、比較的便を缺きしは遺憾であつた。

佛畫には金剛峯寺藏佛涅槃圖、同大日如來、甚日寺藏不動明王像、神護寺藏釋迦如來像、東寺藏兩界曼荼羅、瑠璃寺藏不動明王二童子像、溫泉寺藏十六善神像、山口縣國分寺藏安鎮曼荼羅及び鎌倉芳太郎氏藏五大明王像の國寶九點を蒐めた。そのうち鎌倉氏藏品は圓心筆様を傳へるもので今年新指定の國寶であり、瑠璃寺、溫泉寺、國分寺等の藏品と共に吾人に目新らしき作品であつた。

以上、要するに、出陳點數は僅か乍ら名品を集めたる好個の小展觀であつた。尙展觀目錄に繪卷の詞書を收載されたことは恐らく之が嚆矢で、歡迎すべき試みである。(梅津)